様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２７６

研究課題名（和文）国民小説におけるリアリズムとロマンスーロマン派期英国・アイルランド小説再評価

研究課題名（英文）Realism and Romance in the National Tale: The Re-Evaluation of the British and Irish Novel in the Romantic Period

研究代表者
吉野　由利（Yoshino, Yuri）

学習院大学・文学部・准教授

研究者番号：７０３７７０５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、主要な国民小説におけるリアリズムとロマンスの交錯を、グレイト・ブリテンとアイルランドの合同およびイギリス帝国の拡張といった政治的現実への文学的な応答として検証することである。国民小説のこのように複雑な語りのモードが、イギリスの読者の共感を誘うことを念頭におく文化的他者の表象および連合王国・帝国の理想的な支配者の表象に肝要であることを示した。ロマン派期小説の文学史上の意義、特にその伝統的なリアリズムからの逸脱の意義をめぐり継続する論争に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to examine the conflation of realism and romance in major national tales as a literary response to the political reality of the Union of Great Britain and Ireland, and the expansion of the British Empire. The findings have identified the intricate narrative modes of the national tales as crucial to the representation of the cultural other as well as the ideal leaders of the United Kingdom and the British Empire, which aims to evoke British readers' sympathy. The results have contributed to the ongoing debate about the significance of the Romantic-era novel, especially its deviation from conventional realism, in literary history.

研究分野：人文学

キーワード：ロマン派　国民小説　リアリズム　ロマンス　イギリス　アイルランド　文学史

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、若手研究（B)「女性小説家と愛国主義の創作—19 世紀英国小説を中心に」(2006-2008 年度)および若手研究 (B)「『国民小説』とオリエント表象—19 世紀イギリス・アイルランド文学史再考」(2010-2012 年度）で得られた成果と視座を発展させたものである。これらの研究では、フランシス・バーニー（1752-1840)、マライア・エッジワース（1767-1849)、シドニー・オーエンソン（1776-1859)、ジェイン・オースティン（1775-1817)、ウォルター・スコット（1771-1832)、チャールズ・R・マチューリン(1782-1824)ら 18 世紀後半から 19 世紀初頭の主要小説におけるイギリス国民の理想像、連合王国のあり方、文化的他者、植民地の表象を分析した。その過程の中で、エッジワースやオースティンの作品にみられるようなリアリズムとロマンスの要素の交錯をロマン派期小説の系譜で体系的に検証する必要性を痛感し、本研究課題を着想した。

（２）イアン・ワットが『小説の勃興』(1957）で展開した、西欧プロテスタント的価値と結びつくリアリズムを小説の規範とする文学史観は、イギリス文学研究、アイルランド文学研究、それぞれの潮流で相対化が試みられてきた。このような文学史の修正は、主にイギリス文学研究では小説起源論、アイルランド文学研究では 19 世紀後半の小説研究で、別個に展開されてきた。しかしながら、小説が「勃興」して築いたリアリズムの伝統を崩すことから従来評価の低かったロマン派期小説の歴史こそ修正されるべきであると考えられる。そもそも、ロマン派期研究は、６大男性詩人（ブレイク、ワーズワース、コウルリッジ、バイロン、シェリー、キーツ）の作品研究に偏って繰り広げられてきた。最近は女性詩人の作品や散文に対象を拡大し包括的な研究を目指した潮流になってきたとはいえ、同時代の小説研究は、作品研究、作家研究、サブジャンル研究（たとえば、国民小説、歴史小説など）がほぼ孤立した形で展開し、ジャンル論の域に発展した研究は少数に留まるのが実情である。体系的再評価の動きは学術誌『ノヴェル』(*Novel*）のロマン派期小説特集号（2001）を皮切りに 2000 年代以降顕著になったが、散発的で難航しているように思われた。特に、ロマン派期小説に特徴的なリアリズムの逸脱を肯定的に再評価しながらも、その意義をいかに説明すべきかという問題をめぐる議論に多くの余地が残されたままであった。

（３）本研究開始後出版された『オックスフォード英文小説の歴史』第 2 巻「イングランドとイギリスのフィクション 1750−1820 年」は、サミュエル・リチャードソン(1689-1761)、ヘンリー・フィールディング（1707-1754）の作品がセンセーションをよんだ後、小説ジャンルが停滞期に入ったと従来みなされてきた 1750 年〜1820 年の作品を、体系的に再評価している。批評が成熟したという意味でも小説史上重要な時代であったとする本書の見解は、本研究の方向性の適切さを補強するものである。

２．研究の目的

（１）発展途上にあるロマン派期イギリス・アイルランド小説のジャンル研究を進化し、文学史観を修正・補完する。

（２）リアリズムとロマンスを混在させる語りのモードが、グレイト・ブリテンとアイルランドの「合同」やイギリス帝国の拡大という政治的現実を表象するモードとして、いかに機能しているか検証する。

３．研究の方法

（１）ロマン派期小説の基幹サブジャンルとして「国民小説」(national tale)に焦点を当て、「政治的現実」との交渉を共有した教育・職業言説と独自に結びつけることで、難航する再評価に新たな視座を寄与する。

（２）「リアリズム」と「ロマンス」に関する概念や用語の再検討を行う。特に、マイケル・ゲイマーの先行研究を踏まえ、「現実のロマンス」(romance of real life）というサブジャンルに現れるリアリズムとロマンスの混在に注目する。

（３）理想的な国民像を文化的他者との関係において構築する国民小説のテーマと、リアリズムとロマンスを混在させる語りのモードの関係を考察する。

４．研究成果

（１）「現実のロマンス」というサブジャンルにみられるリアリズムとロマンスの混在

ゲイマーが再評価した「現実のロマンス」という小説サブジャンルの主要作品を概観し、特に代表作であるシャーロッテ・スミス（1749-1806）の『現実のロマンス』(1787）に注目した。フランソワ・ガイヨ・ド・ピタヴァル（1673-1743）が著した底本（*Causes Celebres et Interessantes avec les Jugements Qui les Ont Decidees*　(1735-44)）とフランソワ・リシェール（1718-1790）によるヴァリエーションに対して展開される問題意識と語りの技巧を分析した。スミスの改作は、真正であるとされている「事実」に固執しながらも、作品が興味深くなるようにプロットや構成、語りの技巧の改良を追及している特徴をもつことを検証した。このことから、作品受容への配慮が、リアリズムとロマンスの語りのモードの混在の要因のひとつになっていることを考察した。

（2）国民と文化的他者の表象

主人公が理想的な支配者に成長する過程を主な筋とする国民小説（たとえば、エッジワースの『倦怠』(1809）やオーエンソンの『奔放なアイルランド娘』(1812)）は、その急展開なプロットから、教訓性や感傷性に走る傾向があると評されてきた。加えて、本研究が検証したように、イギリスの読者にケルト辺境を紹介する目的をもつことから、注などの装置を用い、参考文献を引用しながら現地の風習、伝統文化、言語の紹介を通し文化的他者をリアリスティックに表象する体裁をもちながらも、連合王国体制の枠組みに順応しうる存在として理想化する。このように理想を混入してリアリスティックな描写を妥協する特徴は、国民小説が出版当時は熱烈に受容されたものの、正典的作品から脱落した経緯と関連があるように思われた。しかし、文化的他者を詳細にわたって捉えようとする一方、標準文化がつくりあげる幻想をある程度投影するといった国民小説の抱える矛盾は、まさに帝国主義言説の表象行為の本質に通じるといえる。したがって、イギリス帝国の拡張を背景に展開する近代小説の本質を理解するためには、国民小説がリアリズムとロマンスを混在させる語りのモードに注目することが極めて重要であると分析した。

（3）遠隔植民地の表象と読者の共感

エッジワースやオーエンソンの作品は、アイルランドのみならずインド等遠隔の植民地表象を通し、拡張する帝国の植民地支配のあり方を提案している。たとえば、インドを表象する主要作品のオーエンソン作『宣教師』(1811）は、17 世紀インドを舞台に、ポルトガルからやってきたフランシスコ会の宣教師とヒンズー教の巫女の悲恋を描いている。イギリス対アイルランドという構図を地理的、文化的に置き換え、時代設定も数世紀遡る手法をとっている。一方、エッジワースは『オーモンド』(1817）や「足の不自由なジャーヴァス」(1804）で同時代のインドを表象している。「足の不自由なジャーヴァス」と共に『大衆向け物語集』(1804）に収録されている「感謝に満ちた黒人」は、同時代のジャマイカの農園を舞台にし、黒人奴隷の処遇のあり方を正面から捉え、近年特にポストコロニアル批評の見地から注目を集めてきた。本研究を通して、もともとは連合王国内の植民地主義（internal colonialism）の問題系をテーマにアイルランドを主な舞台とした国民小説が、このようにイギリス帝国がグローバルに拡張していく際の問題点を描くメディアとしての小説の意義を強めた過程を考察した。さらに、地理的、文化的に遠隔である植民地へイギリスの読者の共感を喚起するため、アイルランドを舞台にした作品で用いた語りの戦略を発展させる必要が生じたのではないかと論じた。折しも、18 世紀研究やロマン派期研究、さらには「法と文学」の学際的分野で、「共感」（sympathy）の概念の再検討が進み、文学言説との関わりの解明も進んでいる。このような背景から、国民小説における植民地表象の限界が読者の共感の限界と連動していることを、一層広い文脈で考察することができた。

（4）文学言説と職業言説の融合

上述の『大衆向け物語集』は、エッジワースが主要小説の読者層よりも社会階層の低い読者向けに書いたものである。教訓と職業言説を織り込み、エッジワースが父親と共著で著した教育論を例示する機能を持つ。出版当時、フィクションのジャンルでは前例がないほど熱狂的に受容されたとされている。これらの物語におけるオリエント表象やカリブ海表象は、エッジワースの主要小説よりも明白に植民地の近代化を見据えた主従関係のあり方を描いていることを検証した。さらに、植民地支配のリアリスティックな描写と理想化の間を揺れる語りのモードの力学を比較した。特に『大衆向け物語集』がイギリスの読者向けにインドやカリブの奴隷表象においてリアリズムを妥協し、奴隷たちのイギリス人主人への忠誠を理想化する語りの戦略に注目した。『大衆向け物語集』は、文学言説と職業言説を融合させ、主要小説よりもリアリズムとロマンスの語りのモードの幅が広いことを示す特性をもつと分析した。

（5）アングロ・アイリッシュ系作家と国籍化された文学史の問題

アングロ・アイリッシュ系作家のエッジワースとオーエンソンの作品は、『ベリンダ』(1802）のようにイングランドを主な舞台としたものを除き、通常アイルランド文学史の系譜に置かれてきた。しかし、アイルランドを舞台にした国民小説こそイギリス帝国拡張期の小説の特色を示すものとして、イギリス文学の系譜に従来より深く組み込んで検討する必要性を提言し、国籍化された文学史を横断する視座を強化した。

（6）本研究課題の発展

リアリズムとロマンスを混在させ帝国の支配階級のあり方と文化的他者の表象を「ケルト辺境」から発信する「国民小説」のコロニアルな視座が、オースティンの「家庭小説」でいかに変容されて転用されているのか、という新たな論点を着想し、基盤研究（C)「コロニアルな視線の順応化」で発展させることとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

YOSHINO, Yuri, “Maria Edgeworth’s Representation of India: The British Empire and Sympathy in ‘Lame Jervas’ (1804)”, 『ジェインオースティン研究』、査読無、第 10 号、2016 年、115－27

〔学会発表〕（計３件）

① 吉野由利、「19 世紀英国とアイルランドの文学観光—Austen と Edgeworth を中心に」、日本英文学会第 87 回全国大会シンポジア第 2 部門、2016 年 5 月 28 日、京都大学（京都府京都市）

② 吉野由利、「マライア・エッジワースのインド表象—イギリス帝国と＜共感＞」、日本オースティン協会第 9 回大会シンポジウム、2015 年 6 月 27 日、フェリス女学院大学（神奈川県横浜市）

③ 吉野由利、「ロマン派期イギリス小説研究の現在—ロマンスとリアリズムの交錯、学習院大学人文科学研究所第 33 回談話会、2015 年 5 月 19 日、学習院大学（東京都豊島区）

〔図書〕（計２件）

① 吉野由利　他、松柏社、『一九世紀＜英国＞小説の展開』、2014、24-44

② 吉野由利　他、『十八世紀イギリス文学研究第 5 号—共鳴する言葉と世界』、2014、96-113

６．研究組織

(1)研究代表者

吉野　由利　（YOSHINO、Yuri）
学習院大学・文学部英語英米文化学科・准教授

研究者番号：７０３７７０５０